

GR
白雲郷

とりお



39

昭和52年 5月 1日

宗教法人
白雲山鳥居観音

表紙説明

宗教法人 白雲山 鳥居観音あじさい

本堂及庫裡の周辺に散在している
あじさいが、6月には園内一ぱい
に咲き乱れます。

とりる第39号目次

表紙	白雲山の境内のあじさい	
大鐘楼落慶を祝して	平沼桐江	一
達磨大師進呈に当って		二
鐘声の功德	尾尻天外	三
道光禪師御法話(其二十一)		四
西遊記(其三十三)	岡部千三	七
田舎医者(其十九)	見川鯛山	十
大鐘楼建立協賛各位芳名		十三
鳥居観音だより		十九
裏表紙	鳥居観音案内図	
夏の行事案内		



大鐘樓の落慶を祝して

平 沼 桐 江 八十六翁

五月の佳き日を迎え、茲に大鐘樓の落慶をみるに至りましたことは、誠に感激深いものがあります。

昨年の春から、御協賛の御願いを申し上げましたところ、関係各位並に、十方有縁の方々のご理解によりまして、厚いご協力を賜り、お蔭おもちまして茲に落慶、撞初め式を挙行する運びと相成りました。

時あたかも白雲山は新緑萌え、万花咲きみちて、祝福し会っているかに感じられます。

四十年の間撫育して来た、山内の花木はようやくやぐ成木して、四季とりどりの花を咲かせてくれます。

特に森のつゝじの花の美は有名となりました。

楓もつつじ同様に年数を経て、調和よく生育して大鐘樓をとりかこんでいます。

秋になりますと山内の紅葉は実にきれいでございます。この紅葉も年古るにしたがって、近隣での観楓の場所となりました。

私の最後の悲願となりました、大鐘樓の落慶によりまして、山内は一段と整い、形式も異彩も放つことになりました。

種々の祈りを込めて撞鐘される鐘の音は、山内になり渡り、その余韻は花の中に、霧の中に消えるでしょう

鐘のひびきと云うものは、人の心に強くひびくものです。そして何かを思い起すものです。

朝の鐘、夕べの鐘に、祖先菩提、平和への祈り、諸願成就等、真心込めてお撞き下さるならば大鐘樓建立の意義が深まることと喜ぶ次第であります

達磨画の進呈に當つて

平沼桐江

八十六翁

達磨大師は、お釈迦さまから、二十八代目にあたる印度の坊さんで、中国に禅を伝え、日本禅宗の開祖に當る方です。

日本では「だるま」として古くから「七転び八起き」の縁起物となり、又禅の達人として、世間の俗物共を睨みつける軸物から、仏画となつて床の間に掲げられているが、神でもない、仏さんでもない人が、どうしてこうまで親しまれているのであろうか。達磨さんはもともと、印度の或る国王の第三子、生来の英邁さを見込まれて坊さんになり、「菩提達磨」の名をもらわれた。それから四十数年間、師匠のもとで、こつびどく、徹底した修行鍛練を受けられたが、ただ一度も愚痴をこぼさなかつたといわれている。

大器に到達した達磨は漸やく許されて、諸国の巡

教に出、いたるところで邪見学者や他教信者の法難に遭われるが、得意の雄弁舌鋒で、ことごとく説伏し、終には国王の篤い信任を得、巷に信奉者が充満したといわれる。

この間六十七年、不屈不撓、達して尚止まなかつた。まこと信念の塊りの人だつた。

並みなら、ここで功成り名を遂げたと、するであらうが、達磨は「論破す幾十年、何の益」と自省し「直指人心見性成仏」……人間はそのまま仏である、その本心を見抜くこと……と、禅一筋には入ることを決め、師匠の遺言に従つて中国に渡られた西暦五二〇年、時の梁の武席の善政自慢を「無功位廓然無聖」……自惚の心を洗い落せ……と訓され、更に嵩山という洛陽の東南方にある山の小林寺に入られて、坐禅三昧面壁九年、国王の招聘にも応

せず、ひたすら禅の布教につとめ、終に「慧介」という弟子に真随を伝えて、再び印度に帰られたが、百五十才で長逝されたといわれる。一四五〇年前のことになります。

度量の大家。

不屈不撓。

達して尚止まなかつた人……九十九里をもって半ばとするのとは格調が違います。

そして無我に徹し迷いのなかつた人。兎も角、偉い坊さんです。

私は本年度、八十六才になりましたが、みなさんとご一緒して、この達磨さんに、あやかりたいと思つて、達磨の一筆書きを、お煩かちすることにしました。

偶々、鳥居観音に、大鐘楼が落成いたしましたがお詣りの方々の撞かれる鐘の一声一声が、ご先祖さんの供養ともなり、又達磨さんの説法の声として、心深く銘じていただけるなら、まことに幸と、するところであります。

台學

鐘声の功德

鳥居観音侍僧 尾尻 天外

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常のひびきあり」
お釈迦様のおいでになつたお寺の鐘の音は、聴く人の病苦災難を洗い落してくる功德があつたことを伝えていきます。

見ること、聞くことで動かれ易い人の心は、積りに積もつて百八の煩惱とさえいわれていきますが、響き渡る梵鐘の音に聴き入るときには、自然に清められ、安らいで、よりよい日常が送られます。

除夜の鐘、お寺詣りで撞く鐘は、人の願いをこめこの美しい習わしとなりました。

鳥居観音の鐘楼の建立も、発願主平沼翁の永年の宿願であつて、沢山の方々のご信心の凝つて一丸となつた成果であります。この上は有縁の方々は勿論のこと、この鐘声にご縁の結ばれる方々の、いよいよ数多くなりますよう、祈念申し上げます。

台學



道光禪師
(故高階瓏仙猊下)
御法話

(其の二十一)

禪の宗意から仏教を話す(その三)

一つまちがうと、丁度爆弾をかかえているようにいつ爆発するか、危険きわまりないのであります。その毒悪人の、たけり狂うときの、すさまじいことを、「大火の越逸なるも、たとえとするに足らずと申されております。

われわれのこの妄想心が、たけり狂ったときの、猛烈さは、震災や戦災などの、す早さどころではありません。われわれの心の一面には、そういう恐ろしさが存在しているのであります。なおこの「妄心」と「真心」とをいいかえますと、妄心は仏教でいうところの凡夫心で、これに対して真心は仏心であります。また妄心は自我の根性で、いつも、おれが、

おれが、おれがという奴でこの我執が仏教では、もつとも悪い奴であります。おれが……貴さまが……とたえず衝突する。角だらけの心に苦しめられている。この自我に対して、真心は無我心であります。それからまた、妄心を「煩惱心」ともいい、それに対して、真心は「菩提心」とも申します。

ぜんたい煩惱ということは、仏教では八万四千の煩惱と申しておりますが、これはわれわれをなやますところの妄念作用を申すのであります。この煩惱心になやまされ、駆使されているから、それを凡夫というのであります。

つぎに「真心」の方をお話いたしますと、前にも申しましたように、われわれは妄想心をとらえて、それを自分の本心だと思っているのは、ちやうど、番頭を主人公だと思っているようなものでありますから、もう一つ奥に、主人公たるべき本姿のあることを知らなければなりません。それが真心というのであります。その真心はどんな姿か?……一点もその汚水によごれず、実にあの清浄な姿をたもって

いる。お釈迦様が蓮の花を賞愛なさるのも、そのためであります。それなのに世間人は、蓮華を見ると、なんだか!!ほとけがくさくさく思つて、他の花に對するのとは、ちがつて感ずるようですけれどもそれは死を連想する仏事の花と思うとらわれにすぎないので、真に自体、清浄な花なのであります。

けれども、われわれの「真心」の清らかさは、それよりも超越した、清らかさであるというお徑の意味であります。私たちはそういり清い、美しい本心を持つているということを自覚しなければなりません。この心があつて、独立自尊の精神がおこりまゝす。すなわち、この心にわれわれが生きることであります。真に自己の尊さが知られるのであります。仏教で凡夫が転向して仏になるということも、この心があるからであります。

仏教で、「一切衆生悉有仏性」といいます。それは一切の人類には、みなことごとく仏の本性があるというのであります。それはすなわちこの清き真という、これも丸い、四角いとは、いわれないの

ですが、この心はとにかく美しい、もつとも淨らかな姿であります。これは実に清浄無垢の姿であります。

三

その真心の清らかなようすと、超日三昧經に、「世に処して、虚空の如く、蓮華の水につかざるが如し、心の清浄なること、かれに超うる」と説いてあります。

虚空というのは、空間のことで、このなかをつぶさに見れば、汚ない浮塵が一杯にあります。それは別として、ここに色彩をつけようとして、終日えのぐ筆を空間にむかつて振りまわしても、決して色に染まることはありません。そのようにお互いの、「真心」すなわち仏心は、不純きわまる妄想心のごきのなかに包まれていても、決してそのために汚されるものではありません。また蓮華の水につかざる如しとは、これは蓮華が、あきたない泥水のなかから生えていますが、葉にしても、花にしても、心のことでありまして、仏心とも、また自性清浄心

ともいうのであります。

釈尊は、四月八日にお生れになりました。生まれるとただちに、天地を指さされて、

「天上天下、唯我独尊」

とおっしゃった。やさしくいえば、天にも地にも己れ独りということでありませう。これは釈迦がいかに、うぬぼれを叫ばれたように聞こえますが、決してうぬぼれではありません。これは一切の人類に、自覚を呼びかけられた暗示の第一声であります。すなわち、一切の人類は、妄想心に支配されて、自己の真心に目がくらみ、自分自身の貴い価値を忘れて、いるけれども、これがひとたび「真心」に自覚するとき、みなことごとく天地の間に立って、一步をゆずらず、人おのおの独立的なりっぱな価値をもっているのですから、これをよびままして、人々を「天上天下、唯我独尊」と自信し得る自覚者に導こうという、釈尊出世の一大暗示と受けとらなければなりません。

これが、仏教がキリスト教の教義と基礎を異にす

るところで、キリスト教は天国に生まれることが救いでありませう。天国に生まれてどういふようなものになるかという、男は神僕、女は神婢となるのに過ぎませぬ。だから天国にいつて神につかえることが救いであつて、神さまに自分もなれるとはいひませぬ。ところが仏教は、一口に極楽にいくといひませぬが、極楽について仏の小使をするのではありませぬ、進んで仏となりうる事ができるという。それだけ人間に、貴き価値を見こんで、そこから一切人類の救済を説かれてるのであります。

ですから、われわれはこの意味において………「天上天下、唯我独尊」をさけび得る、自分の尊さを持つて、自信を持たなければならませぬ。しかしそれをまちがえて、自我を中心として、自信力と想うのはうぬぼれで、それは慢心がともない、わがままを主張して、自他をわざわいすることになるものであります。

(以下次号)



西遊記

(其の三二)

岡部千三

独角大王(前号より)

八戒は、さっそくその着物を持って法師のところ
いそいそでもどり、

「おししようさま、いいものがありましたさむさ
をこれで、おしのぎください。」

と、その着物をさした。

「いけない。ひとのものをだまってるのは、ぬ
す人です。もとのところにおいてきなさい。」

法師は、やさしくしかった。

「いけないのですか。では、ちよつとためすだけ
にします。ためしたら、又すぐにもとへもどしにま
います。」

八戒は綿いれをきてみた。悟浄も着た。

すると、綿いれは、一本のなわになって、八戒と

悟浄をぎりぎりつよく、しめつけ、なんとしても
ときほぐすことができない。そのとき、ものかげに
かくれていた怪物が、ぬうつとすがたをあらわした
「とうとう、わなにかかったな、そうだ、この三
人をかくしておけ。」

その、てしたに云いつけて、三人をどこかへかつ
いで行かせた。」

悟空がもとの場所に帰ってみると、法師達はいな
く、輪の外がわに足あとがみだれていた。

「あのやしきへ、つれていったとみえる。よし、
おししようさまをとつかえそう。」

悟空は、門のまえへいって大きな声でどなった。

「門の中の者、よくきけ、斉天大聖孫悟空がこれ
へまいった、おししようさまを返せ。」

「はっはっは。きたか悟空め。」

門の中からでてきたのは、独角大王という。さい
に似た、怪物だった。

「法師はわたせない。さあいつきうちだ。お前が
勝ったら法師を連れて行け、だがなア、まずそうは

いかぬぞ」

びゆーん、さっ、と槍を突き出して、悟空を、いもどしにしようとした。

悟空は如意棒、独角大王は槍で、たがいに、つくひく、ふりまわす——。ふたりは、しばらくあらそっていたが、仲仲勝負がつかない。そこで、独角大王は、大勢の手下をよんで、悟空をとりまくように命じた。やがて悟空は手下によって、とりかこまれてしまった。

「なんの。これしきに、何人でもやってこい。」
悟空は、如意棒を空中へなげ上げた。

「かわれっ。」と、一声すると、一本の如意棒が百本、千本になって、雨のように、独角大王の頭上にふりかかってきた。

「やるな、悟空」

大王はにやりとして、白い輪をとりだし、

「くつつけ。」といいながら、空へなげあげた、輪はまっすぐにあがって、まっすぐにおちてきた。そしてたくさんの如意棒をすいよせると、すい、す

いと、大王の方へはこんで行ってしまった。

これには悟空もびっくりしてしまった。が

「なあに、こんなやつにまけてたまるものか、まごまごしていると、天竺へいくのがやたらおくれるばかりで、おもしろさまにもうしわけがない、天上へのぼって、玉帝さまのお力をかりるとしよう。さっさと、空へまいあがり、とんで行った。

「いや、どうも、独角大王というやつ、妙な武器をもっている、見かけはただの白い輪だが、まはうの輪とでも云うのかしら、わたしのだいじな如意棒も白い輪にはかありません。とうとうまきあげられました。どうぞお力をかして下さい。」

悟空は、玉帝の前に小さくなって、たのんだ、玉帝はかるくうなずいてから、けらいたちを見まわして、云った。

「たくとうり天王。まだ太子。悟空にすけだちをしてやってくれ。そうそう。雷神をつれていって、かみなりぜめにするがよい。」

天王も太子も、天上でひょうばんの勇士だった。

その上雷神もいっしよだから、今度は独角大王をひとひねりにできると、悟空はもう大よるこびであるところが、いざたたかってみると、おどろいた。独角大王の白い輪は、天王の武器も、太子の武器も、すうい、すういとすいとすいとうつてしまふ。雷がなつてもびくともしない。

「あの白い輪さえなければ、まけはしないが、……この上は火徳星の力をかりて、独角大王をやきほろぼしてやるまでだ。」

悟空は、こう考えた。

火徳星のところへいってわけを話し、力をかしてもらいたいとたのんだ。

「よし、その白い輪を灰にしてやろう。」

火徳星は、いきおいさかんに独角大王にむかっていたが、これもやっぱりどうすることもできなかつた。空からなげおろした火が、白い輪にすいよせられて、じゅっ、じゅっと音をたてて、きえてしまつたのである。

「火がだめなら、水だ。」

悟空は、また天上へとびあがつていった。

「独角大王の白い輪には、火はやくに立ちませぬ。このうえは、水ぜめよりほかにないと思ひます。どうぞもう一ど、お力をおかしくください。」

水の神の水徳星にたのんだのである。

水徳星はこれをきくと、

「わたしも、力いっぱいたたかつてみたいと思つていたところです。さあすぐいくよ。」と、たいへんなげんきで、悟空の先に立つた。

「ところで、どうして、水をはこぶのですか。」

と悟空はたずねた。

水徳星は手ぶらである、どこに水があるのかと、悟空はふしぎに思った。

「ははあ、ごらんなさい、これだよ。」と水徳星は、一つのはちをだしてみせたのである。

「えっ、そんな小さいもので、独角王をおぼれさせられますか。」

「できますとも、まあ、みていなさい。」

(以下次号)



鱒(つづき)

田舎医者(其の十九)

見川鯛山

狐師がいよいよ怒り出した。ことがおだやかでない。私はあんまり大きな外科は出来ないから、あわてて云った。

「いいよ、いいよ。銭なんかいつだっていいんだ。それにほんとに、百円でいいんだから。なにも、今日払わんだって……」

「いいや、そうわいかね。この坊主ムジナみてえに狡いけど、今日払わせねえとあは死んだって払わねえだかな。先生みる、あん畜生銭の話になつと野糞みてえに黙りこみアがる!!」

と、糸吉が出来るかぎりの悪態をついたが、流石はお坊様だった、彼は一言もものを云わず野糞のよりに静かであった。

「先生この通りだ。わかるべ? この狡い面つきアまるで狸だ。こうなると一寸ぐれえ突ついたらつて、このムジナ、死んだふりして動きアがらねえどよく見てろほれ」

と、名僧知識のイガ栗頭を指で押したが、お坊様は頭をぐらりとさせただけで、まだ死んだふりしていた。

「な、俺が云った通りだべ先生。こいつア狡い坊主だ。部落ジアケチンボで有名な坊主だわな。ま仕方ねえ、銭は俺が払うことにすつべ。先生にアめいわくかけんねえもんな。だからな先生、百円の方だ糸吉があごをかきながら云った。なんだか私はそんしたみたいだった。

「ジアま遠慮なくそうして貰うべ。すまねえな先

生。銭はこの次ここさま来たとき払うからな、今は一銭も持ってねえだから。俺、河原から真ツすぐここさま来ちまっただ。朝から川鱒を突きに行つてたもんでな。俺、やつと一匹でかい奴を突いただが、それたら、この糞坊主がそれを盗みやがったぞ」
彼が云うと、その時突然、お坊様がこつちを向いた。怒った顔だった。

「盗んだなんて、とんでもない。私は僧侶だ、盗みだけはやらない!!」

「なにっ!! 盗まねえだと? おめえ盗んだでねえか、俺が突いた鱒盗んで逃げたでねえか、うそつくもんでねえ!!」

「うそ? 僧侶はうそも言わねすタ。鱒は拾ったですタ!!」

と、さっきまで死んだふりしていた坊様がむきになって云った。うそと盗みは仏門ではきびしく戒められてゐるらしい。

だが、衆吉は云いつづけた。

「先生だまされんなよ。この坊主は盗んだだから

な。だから逃げてつただ、俺追つかけたらあわてて馳け出しただぞ。悪いことしねえばなんして逃げるだ? なあ先生」

「いいえ、私は拾つたですタ。盗んだなんてあなた聞きのわるい。私はもう我がんが出来ない!!」
「がまん出来ねえ? ンだら如何^どにする。俺とやる気か!!」

盛り上つた筋肉をブルブルさせて、蛭田衆吉が、仁王だちに立った。もうすっかり苦痛の去つた。もと通りの獵師だった。するとお坊主は素早く私の背中へ廻り、私の脇の下から顔だけ出して云った。

「この人、怒つてばかりいて話になりません。先生この人に、少し黙つてくれるように命令してください。」

私はほんととは、何も弁解がましいこと、別に云いたくありませんですタ。でも、もう云わしてもらいますタ。私は一部始終を先生にきていただきたくすタ」

お坊様は私の背中であつてゐた。私は彼が気の

毒だし、医者と坊主のよしみもあるのだ。だから、
象吉に云った。

「せつかくお坊さんが云うんだ、あんたもいいかげんにおとなしくしろ。さ、そこに腰かけて話をきいてやれ。」

どうせ私は、もうひまなのだ。一服しながら珍魚つりの一部始終を聞いてみたくなった。

.....

那須高原を北から南へ流れ、常陸の海へそそぐ那珂川は、その速い流れに真夏の太陽が照りつけて、川頼の波がキラキラ眩しい。

毎年この頃、その上流へ鱒が群れて溯上するのだ。蛭田象吉は鱒突きの猟師である。大きな体格、水に濡れた褐色の肌が陽を受けてたくましく光り、岩に立ってじっと水面を見る目が猛禽のように鋭いのだ。彼は流れの中に銀色に光る獲物を発見すると、バネのような脚で岩をけて跳び、あるときは淵にくぐって岩底にかくれた鱒を突き刺し、又ある時は石ころの浅瀬をしぶきをあげて走り、つつ逃げ

迷う獲物にはっしと三叉のヤスを投げる。するとその鋼鉄の刃は一寸の狂いもなく鱒のなめらかな腹を突き通すのだ。

蛭田象吉は川の英雄である。突き殺した獲物を無造作に荒縄でくくり、ヤスの柄にひっ掛けて担いで行く彼の姿を、大勢の釣り人たちが羨望と憎しみの目で見送るのだった。

半俵部落のお坊様はその釣師の一人なのだ。

彼はせみしぐれの本堂でひとしきりの読経を終えると、釣り竿をかついで裏口から抜け出し、チョコと畦道を渡って河原へと出る。

さてその日。蛭田象吉がさつと投げつけた三叉のヤスは鱒の腹を突き通し、鋭い刃尖が岩に当って折れた。すると二尺に近い鱒は浅瀬を跳びはね、もがきくるしみながら、その身を岩角にげき突きさせて、ヤスを振り落し、深みにくぐってその姿を消してしまった。

「畜生め!! 畜生め!! どこさ行きアがっただ」

(以下次号)

大鐘樓建立協賛者芳名

(第二号)

敬称略

五〇東京	五〇所沢	五〇所沢	五〇青梅市	五〇飯能市	五〇川口市	五〇与野市	壹〇〇狭山市	壹〇〇浦和市
片倉チツカ リン(株)	北中観音 講中	小山権之丞	武藤長次郎	水上清	富沢幹太郎	埼玉配電工 業(株)	清水逸平	青山俊一
貳〇青梅市	貳〇飯能市	貳〇飯能市	貳〇飯能市	參〇東京	參〇秩父市	參〇入間市	參〇飯能市	參千円 飯能市
増田 義一	曾根丈治郎	大野 宣圀	馬場元一郎	新妻 挙子	松本忠太郎	吉田 健	本橋 進	本橋 九蔵
壹〇飯能市	壹〇飯能市	壹〇飯能市	壹〇飯能市	壹〇飯能市	壹〇飯能市	壹〇飯能市	貳〇東京	貳千円 秩父市
山川 佐	倉掛 一男	岡村 政一	中野 重雄	原島 勉夫	高橋 謙吉	加治 栄一	石田 宗国	小池 清
壹〇所沢市	壹〇所沢市	壹〇所沢市	壹〇所沢市	壹〇東京	壹〇東京	壹〇狭山市	壹〇飯能市	壹千円 飯能市
新井富次郎	岩崎悦太郎	荻原登喜男	岩崎 レン	千田儀一郎	岩井 柳月	宮岡 伴吉	高野 繁	安藤 紀

五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	老○名栗	老○名栗	老○東京	老○東京	老○東京	老○所沢市
島崎 竜平	中島 とき	小畑 雅信	見沢 孝	岡部 安一	石井 光男	東京 正鋒 通研 支部	佛和 風堂	若林 とく	本橋 俊男
五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	千円 五所沢市
荒幡 武一	中 重吉	増田 千代	中村 キチ	新井 武三	沢田 左官	三上 利平	荒畑正三郎	荻野 よし	森田善三郎
五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五川越市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	千円 五所沢市
我野 進	粕谷 治策	小畑 新一	岡田 昇一	鈴木 茂	田中千代子	新井喜久治	三上 庄一	北田栄太郎	木下 幸二
五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五川越市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	千円 五所沢市
三上宗兵衛	内野 保	森田 源吾	鈴木 金作	大沢 晴夫	北田 加納	和山 実	鈴木十三雄	岡田 喜作	小畑 昇

五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	千円 五所沢市
鈴木 秀子	大館 文雄	大館 甚平	島崎 広司	中村 アサ	神山 いと	森沢 隼吉	三上佐五郎	野村清太郎	沢田 とみ	
五入間市	五飯能市	五入間市	五名栗	五名栗	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	五所沢市	千円 五所沢市
小田 徳一	間辺 辰雄	石井 百蔵	浅見 茂治	岡部 靖司	川口 重雄	小畑 潤長	三上 重郎	関沢 延	鈴木 貞男	
五川崎市	五横浜	五東京郡司	五東京郡司	五東京 桜井 銈一	五東京 田中字一郎	五東京 田中 節子	五川越市 小川亀太郎	五名栗 吉田 昭二	五入間市 宮岡 良治	千円 五入間市
吉田 一男	五十嵐峰涯	仲孝	みち							
参入間市	参上尾市	参大宮市	参大宮市	参与野市	参所沢市	五瑞穂	五蔵市	五入間市	五名栗	千円 五名栗
大矢 浩平	柳 正夫	五十嵐 稔	矢島 一男	矢島 繁	粕谷 常夫	西村 金平	大泉 俊夫	原 進	原田 雅義	

参妻沼	参熊谷市	参行田市	参行田市	参秩父市	参狭山市	参狭山市	参東京	参深谷市	参日高町	千円
高柳博	(有)セイシン自動車工業	榎本富郎	高橋正治	中畝正美	六本木初代	六本木辰蔵	坂野シゲ子	中島清吉	大川戸要吉	
参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参熊谷市	参飯能市	参日高町	参大宮市	千円
前原又五郎	川村好二	石井菊三	滝田益太郎	山岸市治	森下戒寿朗	中村電気工業	清水利男	真野信治	浪江和夫	
参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	千円
榎田静雄	浅見房吉	町田松三	小沢明好	中村昇作	小沢治雄	塩野貞一	荻野栄一郎	田地与志	枝久保松三	
参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	千円
榎田将一	柿沼宮太郎	柿沼金太郎	榎田林造	安部酉三郎	浅见道好	浅见茂一	浅见清造	島田克夫	浅见金作	

参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	千円 参名栗村
浅見 三作	中村 亀三	高橋 良助	島田 均	新井 孟	島田 穆彦	岡部 好央	佐野 伊平	塩野弥太郎	谷合 貞一
参所沢市	参所沢市	参所沢市	参所沢市	参所沢市	参所沢市	参所沢市	参名栗村	参名栗村	千円 参名栗村
大館 奈 <small>ナイ</small> 崩一	大館 惣吉	肥沼 秋男	肥沼 保夫	肥田野 孝	鈴木 みつ	小畑 タケ	塩野 祐司	岡部 武造	吉田 武彦
参練馬	参東京	参川越市	参川越市	参川越市	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	千円 参名栗村
志賀 豊三	田中 カツ	福岡 広吉	村山 卯八	福田 富八	竹内 敏晴	田地 章寿	岡部 久治	石井 栄治	浅見栄三九
参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参大磯	参川崎市	参飯能市	千円 参練馬
浅見国太郎	町田 禎一	岡部 静吉	宮田 政治	佐野 富治	岡部 治作	鈴木 利雄	太田 清一	山下 秀	竹野 嘉代

参入間市	参越生町	参越生町	参所沢市	参所沢市	参所沢市	参所沢市	参所沢市	参所沢市	千円 参所沢市
粕谷 と志	鈴木音次郎	上 孟夫	大館 すゑ	山崎 長平	大館 佐吉	高橋 繁次	大館徳太郎	大館 勝治	川口与三郎
参名栗村	参名栗村	参名栗村	参大宮市	参入間市	参名栗村	参名栗村	参名栗村	参名栗村	千円 参入間市
吉田 儀一	杉島 保福	塩野 多一	浅見 宗宏	比留間準三	浅見 昭夫	岡部 広次	佐野秋三郎	加藤 茂吉	山岸 トリ
参練馬区	参浦和市	参文京区	参青梅市	参飯能市	参飯能市	参飯能市	参飯能市	参横浜市	千円 参飯能市
松本五良策	堀込 聡夫	大木恒四郎	下田 次作	稲村 富	大野 志づ	岡部 幹雄	武本虎之助	後藤 一蛙	飯能資材(株)
参所沢市	参行田市	参東久留 米	参岩槻市	参川越市	参熊谷市	参浦和市	参与野市	参練馬区	千円 参深谷市
神尾 昌一	加藤 義雄	柳田 正夫	小倉 一郎	山本 俊雄	青木 良輔	伊地知重威	永田 武彦	持木 豊	持田 高良

豊島区	千円 参木俣	英純	所沢市	千円 参粕谷	政一
浦和市	参岩田	明	所沢市	参沢田	源一
羽生市	参堀越	一郎	所沢市	参北田	省治
所沢市	参野口八太郎		所沢市	参土屋	道藏
所沢市	参小島	良治	所沢市	参島崎	政吉
以上掲載 二四六名	貳千円 壹千円	二一七名 四一九名		今後も号を追って ご報告いたします	

鳥居観音だより

終了した行事

春の彼岸法要、春の彼岸という言葉は、仏教語からも、季節感からも、小さい時からなつかしんできた言葉で、何となく心もなごんできます。

恒例によって、彼岸の中日を念仏会として、近く

のお年寄りに本堂へ参堂していただいて、大きな珠ずを手ぐりながら、南無阿弥陀仏と唱えて、鐘をたたきます。この調子が春浅い山狭に流れるのです。いつももなく、信仰への心がわいて来ました。

つつじまつり

四月一日から、五月末日までつつじまつりに入りました。

山内の三つ葉つつじの紫の花が魁て咲き出し、椿、れんぎょう、梅、さくら等が絵巻物のようにそれぞれの花の美をつらねます。

これからの行事とおねがい

花まつり

五月八日 午前十一時 本堂

花にかざられた花み堂の中にお釈迦様の天地を指さされたお婆に甘茶をそそぎ参拝していただきます。

あじさいまつり

六月一日から月末まで、駐車場の上段の花園は、あじさいの花一ぱいとなります。お待ちしています

塔婆供養

七月十六日 午後二時 救世大観音堂内において
東京地方の盆に合せて、塔婆供養をいたします。

多数の御申し込みをおまわいたします。

流灯法要と花火、盆踊り大会

八月十六日 午後四時 本堂内で灯ろうの供養が
開始されます。花模様灯ろうは華麗です。

この御申し込みと御参拝をおまわいたします。

流灯は夕刻名栗川へ運びおごさかに読経のうちに
流されます。

流灯が終る頃、花火大会開催、五彩の色は山峡を
いろどり、流灯法要の呼びものとなりました。

盆踊り大会、天上は花火、地上には盆踊りの人の
輪がつくられ、レコードによって流される民謡に浴
衣人は手ぶり足ぶりも器用におどりまくりまします。

大鐘楼落慶祝吟

名栗俳友会

佳き日得て花の中なる鐘供養

霞山

宿願の鐘落慶に風薫る

鐘樓の落慶成りて松の花

鐘撞けば余韻かすみの中にある

花散るや鐘に暮れゆく九十九谷

佳き日なり落慶祝う花の山

ご詠歌の鐘ものどかや花の山

鐘樓は三ツ葉つつじの花の中

春光に菩薩は笑みて立ち給う

我が庵は菩薩をせなに春たのし

今日も亦鐘を撞きけり春の客

山ざくら朝日に映えり鐘の音

鐘つけば萌え立つ靈山の若葉哉

一筋の参道めぐる花の山

春山や珠数を片手に撞木引く

梵鐘の撞き出す桜浄土かな

好 螢

滴 水

新 月

狂 句 朗

松 次

倫 一郎

忠 雄

と し 子

光 楽

正 春

正 義

千 昭

秋 月

句 迷 子

とりゐ 第三十九号 発行日 昭和五十二年五月一日

編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三

発行人 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社

発行所 鳥居観音 電話 〇四二九七―九一〇四一七

白雲山

鳥居観音
観世者センター
案内図



夏の行事

○あじさいまつり 6月1日—30日

○塔婆施餓鬼法要 7月16日 14時

法要料1塔 1千円

お申し込7月15日迄

○流灯法要 8月16日 16時

法要料1灯 1千円

お申し込8月10日迄

○其他祈禱

常時執行 1千円より

受付当山寺務所

電話申込 04297 (9) 0417